

■■■■■■■■ 紹介 ■■■■■■■■

## 「資本論」の具体化をめぐるいくつかの論点〔Ⅱ〕

——コーガンの (Корган, A.M.) の問題提起——

中 野 雄 策

### はじめに

「経済学批判体系プラン」(K.マルクス)についてのA.コーガンの研究ならびにこの研究にもとずいておこなわれた「資本論」の具体化・現代化のための一連の問題提起については、すでに本誌18巻4号と19巻1号で紹介した。ここでは、そのご発表されたコーガンの2つの論文を追加紹介する。ひとつは、当然予想された「賃労働にかんする特殊理論」についての問題提起<sup>①</sup>であり、いまひとつは、すでに紹介した論文のなかでかんたんにふれられていた非物質的生産部面の経済学的分析のための基礎的論究<sup>②</sup>である。

現存の「資本論」は、マルクスの構想した批判的体系の礎石をなす「資本一般」を剰余価値の理論として展開したものであり、信用分析について若干の変化があったり、特殊理論的材料の混入がさけられなかったとはいえ、当初のプランはけっして放棄されたり変更されたりはしなかった、というのが「プラン」問題にたいするコーガンの結論であり、主張であった。「資本論」における賃労働分析」についてのかれの解釈のなかでもこの観点はつらぬかれている。すなわち、「資本論」では価値増殖の必要条件としての賃労働の運動だけが分析されており、剰余価値の運動から相対的に自立した(あるいはこれに対立的な)賃労働の諸現象は分析されるべきでないし、分析されていない。たとえば、実質賃金の変動や労働組合運動を捨象しなければ、価値増殖の経済的諸条件を純粹に把握することは不可能であった、とコーガンはのべている。このことは、いかえれば、実質賃金の変動や労働組合運動(これらの問題はいずれも賃労働の具体的・現実的発現として無視することはできない)などの価値増殖の必要条件ではないもろもろの賃労働現象は、「賃労働にかんする特殊理論」の対象となるし、ならなければならない、ということの意味す

る。「賃労働にかんする特殊理論」が包括する問題領域（労働者階級の構成やその変動、労働組合組織の部門別特殊性、農業労働者や俸給労働者の特質、賃金にたいする流行や租税などの影響、労働者間の競争、具体的賃金形態、等々）については大量の事實的、理論的材料の蓄積がみられるが、肝心なことは、これらの材料を体系化できる独特の論理を構築することであり、しかもそのさい、剰余価値の必然的モメントとしての賃労働——これが「資本論」で分析された——こそがこの「特殊理論」の発生的展開のための要素細胞だということである、とコーガンは強調している。

第2の論文「「資本論」における生産的労働と不生産的労働との区分の問題」も、たんに「資本論」解釈をこととする論文ではなく、「資本論」の具体化・現代化のするどい問題意識にうらづけられている点を看過すべきではないとおもわれる（もっともこの論文だけではこの点かならずしも鮮明ではないが、既紹介の議論をあわせ読まれたら了解されよう。——山口経済学雑誌、18巻4号、76～77ページ参照）。コーガンの問題意識は、要するに、非物質的生産の比重上昇という20世紀的現実と「資本論」における非物質的生産の捨象という事実のあいだの矛盾を解消しようという点にあり、かれは、そのためのいっさいの（事實的、理論的）前提・条件があると判断しているのであり、そのために生産的労働と不生産的労働との区分が物質的生産と非物質的生産との区別と無関係であることを確認しておくことが重要であるとかんがえるのである。したがって、かれの問題意識は、「資本論」の基礎的範疇・命題の明確化にとどまらず、「経済学批判体系プラン」の具体化（とりわけ、第4巻「国家」に内包されている不生産的階級の分析）の問題にかかわっており、さらに現代資本主義（および社会主義）の理論化の問題をも包含しているのである。いうまでもなく、生産的労働のマルクスの解釈が、なんらかの意味において、経済的形態規定性をふくんでいるということ、これを否定するものはあるまい。しかし、若干の例外（たとえば、有沢広己、中村隆英両氏の「国民所得」論にみられる）をのぞけば、たいていは、形態規定を限定的に考慮する（たとえば、山田秀男、野々村一雄両氏にみられる「個別資本の観点」説）だけであり、けっきょく内容規定（本源的規定）の優位を主張することによって生産的労働を物質的生産の内部に限定することになっている。まして、コーガンのように、非物質的生産における価値の形成・増殖を理論的に承認するものはおそらく皆無であるとおもわれるし、このような主張はいずれにしても伝統的なマルクス解釈の枠を大きくこえるものであろう。コーガンは、「資本論」における物質的生産の抽象（あるいは非物質的生産の捨象）の発生的根拠をあきらかにしつつ、（物ではなく）効用

としての使用価値とか精神的生産物の物質性とかの在来の通念をくつがえすような観点を承認することがマルクスの方法と矛盾しないだけでなく、マルクスの理論体系を具体化するための条件であるとかんがえており、こうした議論のうえに非物質的生産における価値・剰余価値の生産、したがってまた精神的労働者の生産的性格を根拠づけようとしているのである。

- ① K.マルクス「資本論」と賃労働研究の方法論 (《Капитал》K.Маркса и Методологии Наемного Труда, Вестник Московского университета, Серия VII, Экономика, 1968г. No.4, стр.1~12 [モスクワ大学通報, 第7シリーズ, 経済学, 1968年, 第4号, 1~12ページ])。
- ② 「資本論」における生産的労働と不生産的労働の区分の問題 (Проблема Различения Производительного и Непроизводительного Труда в «Капитале» K. Маркса, Научные Доклады Высшей Школы, Экономические Науки, 1968г. No.5, стр.34~45 [高等専門学校学術報告集, 経済科学, 1968年, 第5号, 34~45ページ])。

(第1論文)

### K.マルクス「資本論」と賃労働研究の方法論

「資本論」第1巻, 第18章の冒頭で, K.マルクスは, つぎのように書いている。「賃賃はそれ自体また非常にさまざまな形態をとる……とはいえ, このような形態のすべてについてのべることは, 賃労働の特殊理論にぞくすることであり, したがって本書の任務ではない。しかし, 2つの支配的な基本形態についてはここで簡単に説明しておかなければならない」<sup>①</sup>。この命題のなかにふくまれているのは, 賃労働にかんする特殊理論は「資本論」の枠外にでるということ, すなわち〔第18章では〕そのさきのための重要な出発点があたえられているということ, の指示である。

うえに引用した命題のなかで注意をひくのは, つぎの点である。すなわち, 一方では, 資本主義のもとでの賃労働搾取の分析が「資本論」全体とりわけその第1巻を赤い糸のごとくつらぬいているということ, 他方では, マルクスの言葉によると, 賃労働にかんする特殊理論は「資本論」のなかではあたえられないということ。この論文は, こうした外見上の矛盾を解決し, 賃労働にかんする「特殊理論」の対象を解明しようとするものである。

① Marx-Engels, Werke, Bd.23, S.565. [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」]

大月書店、第23巻、704ページ〕。

### 1 剰余価値の理論と賃労働にかんする特殊理論

いっさいの現象は多面的である。それゆえどんな現象の分析もひとつではなく多くの側面においておこなわれる。そして明らかなことは、うゑに指摘した矛盾が、賃労働を2つの基本的側面（第1の側面——「資本論」で叙述された剰余価値理論の枠内での賃労働の分析、第2の側面——この経済的カテゴリーにかんする特殊理論の枠内での賃労働の分析）において研究しなければならない方法論上の必然性の反映である、ということである。

K. マルクスは15年におよぶ資本主義経済の研究ののち6巻本プランをつくりあげ、それにみちびかれて「資本論」の執筆をはじめた<sup>①</sup>。このプランの根本的な方法論上の思想は、つぎの点にある。すなわち、資本の核心的構造の分析（「資本一般」の部）にさいしては、競争、信用、株式資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場の考察は、剰余価値の生産と取得という視角からのみなされるべきである、という点にある。このことは、ここにあげたもろもろのカテゴリーの発生学的根拠をあかすみにだす。ついで、この分析とは別個に、またそれにもとずいて、上記のカテゴリーを、他の視角から、相対的に自立した質的に独自の具体的総体として、研究しなければならない。このような特殊的研究の過程で、上記の個々のカテゴリーの独特の法則——これにたいして剰余価値は間接的に影響するだけである——が解明されるべきである<sup>②</sup>。競争、信用、賃労働などのこうした研究は、これらのカテゴリーをそれぞれ多様なものの統一として反映するのであり、それゆゑに特殊諸理論のしあげとなるのである<sup>③</sup>。

資本主義の一連の経済的カテゴリーを2つの基本的側面において研究することは、K. マルクスが「資本論」を執筆したさいにみちびきの糸とした方法論上の原則のひとつである。この原則の核心を、賃労働にあてはめて、いっそうくわしく解明してみよう。

労働力の使用価値と価値——これは対立の統一である。この対立の統一は労働力商品の質的独自性を最高度に規定するものであり、またこれは賃労働の全多様性がそこから発生学的に展開する「要素細胞」である。たとえば、熟練度は、労働力使用価値の発生的展開現象であり、労働力価値以下への賃金の低下は、労働力価値の発生的展開現象である。賃労働の発生期には、ほぼ価値おどりに販売される不熟練労働力が絶対的に支配していたのである。

労働力の使用価値と価値は、価値増殖の必要条件である。労働力はその消費過程で価値

をつくりだす（労働力使用価値の独自性）が労働力の価値は労働力の再生産に必要な生活手段の価値によって規定されているということによってのみ、貨幣は資本に転化する。

熟練度とか労働力価値以下への賃金低下のごとき労働力の発現は、剰余価値の量に影響しはするが、剰余価値生産の必要条件でも必然的要素でもない。生産のなかで不熟練労働が機能しているときでも、労働力価格がその価値にひとしいときでも、剰余価値は創出されるのである。

だから、賃労働と資本とのあいだに存在する連関のなかには一定の客観的な支配従属関係が存在している。賃労働の排他的特徴——それは賃労働の質的独自性を最高度に規定しており、また賃労働の他のすべての現象の「要素細胞」である。つまり発生学的根拠である——は、価値の増殖すなわち資本の生産（これなしには資本は存在することもできない）の必要条件、必然的要素としてあらわれる。剰余価値生産過程にたいして影響する賃労働のその他の現象は、この過程の必要条件、必然的要素としてはあらわれない。これらの現象と剰余価値の生産との関連は、商品としての労働力の存在によって媒介されている。

さて、賃労働の分析は、どの程度まで、剰余価値の理論にはいりこむのか、を解明しよう。

資本の独自の・差別的特徴は、賃労働搾取の結果剰余価値をになうにいたった価値である、という点にある。「資本一般」（6巻本プラン第1巻第1部）という経済的カテゴリーは、まさに資本のこの特徴をこそ表現している<sup>④</sup>。それゆえに、剰余価値理論は、資本一般の科学的反映なのである。

資本一般は、剰余価値の必要条件としてあらわれるような賃労働の諸現象を客観的に内包している。労働力の使用価値と価値は、その要素的形態においては、そのような現象としてあらわれる。剰余価値理論は、それが剰余価値の唯一の源泉としての賃労働の役割を反映しているかぎり、要素的形態における労働力の使用価値と価値の分析だけをふくんでいる。

価値増殖過程の分析にさいしては、労働力の他の諸現象たとえば熟練度とか労働力価値以下への労働力価格の低下は、捨象する必要がある。こうした抽象の必要は、剰余価値の量にたいする労働力の特性（熟練度、労働力の価値以下への価格の低下）の影響と関連して増大するが、このことがこれらの特性があたかも価値増殖の必然的要素であるかのような幻想をつくりだすことをたすけるのである。その結果、剰余価値のもっともふかい源泉がぼかされてしまう。

うえにのべたことと関連して B. H. レーニンのつぎのような方法論上の指示を想起することができる。「なんらかの複雑な、錯雑した社会＝経済問題を解決するときには、初歩的な原則として、まずはじめに、事態を複雑にするいっさいの副次的な影響や事情からもっともまぬかれている、もっとも典型的なばあいを取りあげ、それを解決してからはじめてさきにすすんで、事態を複雑にするこれらの副次的な事情をつぎつぎに考慮にいれていくことが必要である」<sup>⑥</sup>。剰余価値生産のメカニズムにかんする問題を考察するさいには不熟練労働力が価値どおりに販売されるばあいがもっとも典型的なばあいとなる。まさにこのような要素形態における問題を解決したのちにはじめて、抽象から具体への上向をさらにいっそうつづけることが可能となり、また労働力の熟練度や労働力の価値以下への価格低下の諸問題をとくべつに分析することが可能となる。よく知られているように、「資本論」における K. マルクスは、剰余価値理論のしあげにさいして、あらゆる労働力を簡単な労働力として考察し、労働力の価格はその価値にひとしいということから出発した<sup>⑦</sup>。

資本は、賃労働の独自の特徴のおかげで発生するのだが、逆に賃労働にたいして影響をおよぼし、賃労働を自己のもとに包摂する。だから、剰余価値の理論は、賃労働にたいする剰余価値の規定的影響の分析を内包する（資本のもとへの労働の形式的実質的包摂、賃金の基本形態、労働者階級の絶対的・相対的窮乏化など）。しかしこのばあい、賃労働の独自の特徴はただ、それが資本の運動を反映し、剰余価値の本質的特徴をあきらかにしているかぎり、考察される。K. マルクスは、資本主義的蓄積の一般法則を労働者階級の窮乏化法則として特徴づけたさい、つぎのように書いた。「それは、すべての他の法則とおなじく、その実現にさいしては種々の事情によって変化を加えられるのであるが、このような事情の分析はここではまだなされない<sup>⑧</sup>」。資本主義的蓄積の一般法則の作用を変形させるもっとも重要な事情は、窮乏化にたいするプロレタリアートの階級闘争である。しかし、この階級闘争は、たとえば資本のもとへの労働の実質的包摂のごとく、資本の運動の直接的発現ではなく賃労働にたいする資本の反作用の結果のひとつである。しかも、こうした結果があらわれるのは、賃労働がある程度価値増殖法則に対立してあらわれるとき、すなわち、それが剰余価値にたいして間接的な運動をおこなうときである。そして、資本主義的蓄積の一般法則にたいするプロレタリアートの階級闘争の変形的影響の特殊分析が革命的实践にとってひじょうに大きな意義をもっていたにもかかわらず、K. マルクスはやはりこの分析を「資本論」の枠外にもちだしたのである<sup>⑨</sup>。

これに関連して注目されるのは、つぎのことである。周知のように、K. マルクスは、

労働組合運動に大きな意義をみとめ、それを注意ぶかく研究した。ところが「資本論」のなかでの労働組合の活動の研究は、労働日短縮における労働組合の役割についてのみじかい批評(これは注のなかであたえられた)や労働組合にたいするブルジョア弁護論者たちの攻撃をばくろしたみじかい批評にかぎられているし、また労働組合に敵対したブルジョア立法の特徴づけにかぎられているのである<sup>④</sup>。

剰余価値とむすびついていない賃労働の現象は、みずからに固有の運動をもち、固有の法則をもっている。たとえば窮乏化に反対するプロレタリアートの階級闘争は、はなはだ複雑な過程としてあらわれる。そのなかでは多くの要因が矛盾しあいながら相互作用をおこなっている。すなわち、階級全体の利害、せまい職業的利害、経済市況などなど。自己の経済状態を改善するためのプロレタリアートの階級闘争において重要な地位をしめているのは、労働組合である。労働組合運動は、階級闘争の一般法則によって制約されており、しかしそれとともにこの一般法則の枠内ではそれ自身の自立性ももっている。労働組合運動のいくつかの側面——労働組合運動の自立性はこのなかにあられる——だけを指摘しよう。労働組合にたいする生産諸部門の特質および労働者の職業的性質の影響、農業労働者の経済的地位の特質およびこれとむすびつたかれらの組織化の困難、資本主義企業の技師・技手職員と事務職員の経済的地位の特質および労働組合にたいするかれらの態度、労働組合闘争の各種形態と経済市況、労働者の職業的狭隘性と労働組合の「反動性」への傾向。労働組合運動のなかでとくにはっきりあらわれるのは、賃労働がたんに剰余価値生産の必要条件としてあらわれるだけでなく、剰余価値にたいしてなにか間接的なものとしてあらわれる、ということである。

すでに指摘したように、賃労働は、発生的に展開する多様の統一である。賃労働の発生的展開は、けっきょくにおいて、賃労働の個々の現象のあいだ、ある程度孤立化したものもろの現象のあいだに現実に存在する相互連関を規定するのである。そして、賃労働を多様なものの統一として理論的に再生産するためには、賃労働の発生史によって客観的に制約されている独特の論理(抽象から具体への上向の独特の「くさり」)にもとずいて、その研究を遂行する必要がある。

うえにのべたことのすべては、賃労働が剰余価値理論の対象であるにとどまらず特殊理論の対象でもあると結論するための根拠をあたえる。

賃労働にかんする特殊理論の出発点となる抽象は、あきらかに、使用価値と価値との弁証法的統一としての要素形態における労働力商品である。

この出発点となる抽象から、上向方法にしたがって、賃労働のゆたかな全規定を導出すべきである。

剰余価値の理論と賃労働にかんする特殊理論とのあいだの境界は、賃労働の個々の現象の方向にそってはしっているだけでなく、研究の視角や論理の方向にもはしっている。この境界ははなはだ相対的なものであるが、それは当然である。というのは、研究対象そのものがたがいにからみあっているからである。剰余価値理論と賃労働にかんする特殊理論とのあいだに明確な境界がないということは、両者の限界づけを困難ならしめ、剰余価値に間接的に関係する賃労働の運動の研究にたいする機械的な態度をうみだすことになる。これがために、K.マルクスが「資本論」のなかで賃労働にかんする特殊理論に言及した唯一の指示〔第1巻18章冒頭〕は、いよいよもってとくべつの注意をはらう必要があるのである。

賃労働にかんする特殊理論の科学的基礎たりうるのは、「資本論」においてしあげられた剰余価値の理論である。この理論のなかでは賃労働の「要素細胞」がふかく分析されており、そこから賃労働のゆたかな全規定が展開される。剰余価値論の諸命題は、賃労働にかんする特殊理論のなかに出発点としてもちこまれる。逆に特殊理論は、それが剰余価値の生産、流通および取得にたいして変形作用をおよぼすところの賃労働の多様な諸現象を研究するのである。したがって、賃労働にかんする特殊理論は、剰余価値理論を具体化するものであり、多様の統一としての資本をいっそう完全に解明するものである。

賃労働にかんする特殊理論は、資本主義社会におけるプロレタリアートの経済状態を剰余価値理論よりはるかに具体的に反映するものであり、それゆえに共産主義的諸政党の政策をしあげるうえでずっと重要な意義をもっているのである。

① 第1巻 「資本について」

第1部 「資本一般」

第1章 「商品」

第2章 「貨幣」

第3章 「資本一般」： a) 生産過程, b) 資本の流通過程, c) 資本の生産過程と流通過程の統一, あるいは資本と利潤 (利子)

第2部 「諸資本の競争」

第3部 「信用」

第4部 「株式資本」

第2巻 「土地所有」

第3巻 「賃労働」

第4巻 「国家」

第5巻 「外国貿易」

第6巻 「世界市場」 (Marx-Engels, Werke, Bd.13, S. 7, 639, K.Маркс И Ф. Энгельс. соч., Т.29, стр.254, 449, 451, 468 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第12巻, 5 ページ, 635ページ, マルクス/エンゲルス「資本論にかんする手紙」, 法政大学出版局, 1954年, 85ページ, 76~77ページ, 84ページ 95~97ページ])。

- ② 剰余価値と直接かかわりのない競争・信用・土地所有などの運動についてかたるばあい、われわれが念頭においているのは、これらのカテゴリーが剰余価値との一般的依存関係の枠内で剰余価値の生産や取得と直接関係のない自立的運動をする、ということである。
- ③ 6巻本プランの根本的な方法論上の思想をめぐる問題は、筆者のつぎの論文のなかでとくべつに研究した。「K.マルクスの未完成研究プランについて」(「哲学の諸問題」, 1967年, 第9号〔「山口経済学雑誌」, 第18巻, 第4号, 参照])。
- ④ 実在の現実には多くの資本が存在しており、そのおのおのは反復のない個別性をもっている。だがそれとともに、「資本一般」も実在している。K.マルクスはつぎのように書いている。「資本一般は恣意的な抽象ではなくて、他のあらゆる富の形態——ないしは生産(社会的)が展開されるもろもろの様式——から区別された資本の種差(differentia specifica)を把握する抽象である。そのものとしての各種資本に共通し、またそれぞれの一定の価値額を資本にするものは、こうした諸規定である」(K. Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, 1857~1858, S. 353 [邦訳「経済学批判要綱」, Ⅱ, 大月書店, 384ページ])。さらにK.マルクスが強調しているのは、資本一般が特殊的諸資本とは区別される真の実在性をもつことである。その真の実在性は、それがいっさいの特殊的資本の要素的基礎をなす点にあらわれる。
- ⑤ В.И. Ленин, Полн. собр., т. 6, стр. 328, [邦訳, 「レーニン全集」, 大月書店, 第6巻, 124~125ページ]。
- ⑥ 「……私(K.マルクス—A. コーガン)は、たとえば、労働力価値を規定するばあい、労働力価値はじっさいに支払われていること、「資本主義」のもとではこのことが「寛大である」とかなにかそのようなものであるとかかんがえているシェフレ氏ごときは事実上存在しないということ、から出発する。ただし、これはただ、科学的研究において必要な手つづきにすぎない……」(Marx-Engels, Werke, Bd.19, S. 360)。
- ⑦ Marx-Engels, Werke, Bd.23, S. 674 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 839ページ]。

- ⑧ ベルンシュタインをはじめとする修正主義者たちは、このような方法手つづきをねじまげて、マルクスがプロレタリアートの階級闘争を過少評価した、とするのである。かれらは逆に、階級闘争の成功をもちだすことによって「資本論」のなかであきらかにされた資本主義的蓄積の一般法則がまちがっていることを宣告するために、このテーゼを利用しているのである。
- ⑨ Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd. 23, 267 (Anmerkungen 86), [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 330~331 (注86), 参照]。

## 2. 賃労働にかんする特殊理論の若干の問題

前節で、賃労働にかんする特殊理論のいくつかの問題を例示した。さらに若干の問題をあきらかにしてみよう。これによって、賃労働にかんする特殊理論の対象やその意義がいっそうあきらかになるだろう。

K. マルクスは「資本論」第1巻第15章において、労働力価格と剰余価値との相互関係を考察している。このような分析の目的は、労働力価格の変動が剰余価値にどう影響するかをしめすことである。すなわち、マルクスにとって主要な問題は、労働力価格の動態ではなく、剰余価値の動態なのである。労働力価格の研究のこの側面は、ここでマルクスがおこなっている抽象をも制約している。

K. マルクスは、労働力の支出を補填する生活手段の量が不変量であり、この生活手段量の価値だけが変化すること、そして「商品はその価値どおりに売られ、……労働力の価格は、その価値よりも高くなることはあっても、その価値よりも低くなることは決してない（これは資本主義にとって典型的なばあいではない——A. コーガン）<sup>①</sup>」ということから理論的に出発した。このような接近方法は、マルクスに、剰余価値分析の基本ラインを一貫して敷設する可能性をあたえ（剰余価値の生産は価値法則にもとずいて実現される）、また価値法則の観点からみてもっとも不都合な条件のもとでさえ剰余価値が創出されることをしめす可能性をあたえた。

マルクスは、労働日と労働強度が不変で労働生産性が可変のばあいの労働力価格と剰余価値との相互関係を考察した第15章の第1節のなかで、つぎの法則を定式化している。「剰余価値の増大あるいは減少は、つねに結果であって、決して労働力価値の対应的減少あるいは増加の原因ではない<sup>②</sup>」。マルクスはこの法則を基礎づけるさいに、剰余価値は労働力価値の大きさに直接依存しないが、労働力価格の大きさには依存する、ということをしめした。したがって、労働力価格の価値からの乖離は剰余価値の大きさに影響する。

これに関連してK.マルクスは、つぎのようなばあいを研究している。労働力の当初価値、したがって労働力価格を3シリング、必要労働時間を6時間、剰余価値を3シリング、剰余時間を6時間とする。もしこれらの条件のもとで労働生産性が倍化するならば、労働日の分割が不変のばあい、労働力価格と剰余価値は不変のままであるが、しかし倍化した使用価値量において表現されよう。労働力価値は半分に減り、1.5シリングになる。「労働力の価格が低下しても、労働力のあらたな価値によってあたえられた1.5シリングという最小限界までは低下しないで、2シリング10ペンス、2シリング6ペンス、等々にとどまるならば、この低落した価格も、やはり増大した生活手段量を代表するであろう<sup>③</sup>」。

マルクスが検討した表式例では、労働生産性の上昇が実質賃金を増加させるのは、労働力価格（名目賃金）が労働力価値以上になるばあいだけだということになっている。もし労働力価格が2シリング6ペンスではなく1.5シリングまで、すなわち減少した価値まで低下するならば、実質賃金は不変であり、もし労働力価格が価値以下に（たとえば1.4シリングまで）低下するならば、実質賃金は減少する。したがってこのことは、それにつづく叙述——そこでK.マルクスは労働力価格の価値以下への低下が実質賃金の低下を法則的にもたらすことを研究している——のために重要である。

具体的な資本主義的現実の諸条件は、マルクスが「資本論」第1巻第15章で出発点とした理想的条件とは大いにことになっている。第1に、労働力の価値は労働生産性の変化の影響をうけて変化するだけでなく、労働力支出を等価補填する生活手段量の変化の影響をもうけて変化する（K.マルクスはこのことを「資本論」第1巻第5章で指摘した）。現実の資本主義経済のなかでは、労働力支出を等価補填する生活手段量の増加傾向がみられる。この傾向は、労働生産性の上昇をふくむ一連のファクターによってうみだされる（労働生産性の上昇は労働者の熟練度の増大を促進し、より熟練度のたかい労働力の再生産はいっそう大量の生活手段を要求する）。さらにじっさいの資本主義的現実においては、労働力価格は、しばしば価値以下に低下する。

いったいこれらの具体的条件のもとで、労働生産性の上昇は実質賃金にたいしてどのような影響をおよぼすのだろうか？

当初、労働力価値が3シリングであり、この価値は生活手段10単位にあたる（1単位3ペンス）、と仮定しよう。労働力支出を等価補填する生活手段量が14単位まで、つまり40%増加し、同時に労働生産性が2倍に増加すると、労働力価値は3シリングから2.1シリングまで、つまり30%減少する<sup>④</sup>。また、労働力価格が3シリングから1.8シリングまで、

つまり40%低下し、したがって変化した価値(2.1シリング)以下に(ほとんど15%)低下したものと仮定しよう。しかし、生活手段価値が半分以下に、〔たとえば〕1.8シリングまで低下したとすれば、12単位の生活手段、すなわち労働力価格がその価値にひとしかった当初のばあいより多くの生活手段を購入することができる。だから、労働力価格は価値以下に低下したにもかかわらず、実質賃金は増加したのである。\*

\* (以上のかんたんな計算例のなかで、コーガンは、イギリス貨幣を10進法によって、すなわち1シリング=10ペンスとして計算している。—— 訳者)

うえにのべたことから結論されるのは、労働力支出を等価補填する生活手段量の増大傾向は、マルクスが第15章第1節で発見した実質賃金変化の合則性を変形するものである。

しかしK.マルクスは、この変形を捨象してしまった。このような抽象は、あきらかに、つぎのことによって制約されたものである。K.マルクスが当面した課題は、増大する労働生産性の影響のもとで進行する労働力の価値と価格の低下が剰余価値を増加させるということの説明することであった。労働力支出を等価補填する生活手段量の増加傾向は、この課題の解決にたいして直接関係をもたないのであり、事態を複雑にする事情である。もしマルクスがこの傾向を捨象しなかったならば、かれは、労働力価格がその価値に一致するか、それともそれをうわまわるかということと関連して、増大する生活手段量に比例するように労働力価格を計算しなおさなければならなかったであろう。

うえにあげた問題は、剰余価値の理論とは直接かかわりがないが、プロレタリアートの経済状態とは直接関係がある。このことは、K.マルクスがこの問題の分析を「資本論」の枠からはずして、賃労働にかんする特殊理論のなかにうつした、とかんがえる根拠になる。この種の具体化の2つの方向を指摘しよう。

労働力価格の価値以下への低下が実質賃金の減少をもたらすという命題と現実とのあいだには、統一が存在するだけでなく矛盾も存在している。うえにのべたすべてのことから、賃労働にかんする特殊理論はこの矛盾を解決するものだ、ということになる。

賃労働にかんする特殊理論は、実質賃金の増大と労働力価格の価値以下への低下とのあいだの法則的連関を解明することによって、K.マルクスが「資本論」のなかであたえたもっとも重要な結論のひとつ、すなわち「資本の蓄積につれて、労働者の状態は、その支払が高かろうと低かろうと、悪化せざるをえない<sup>⑤</sup>」という結論を具体化するものである。

実質賃金は、労働者階級の状態をしめすもっとも本質的な指標のひとつであり、激烈な

階級斗争の目標である。そして、賃労働にかんする特殊理論こそが実質賃金の変動の傾向をより完全に解明する可能性をあたえるということは、この理論の重要性を証明している。

賃労働にかんする特殊理論がふくむ問題領域をあきらかにするために大きな価値をもっているのは、1848年にK.マルクスが書きのこした手稿「労賃」である。それは、賃労働にかんする大著の概括的草案である。

手稿「労賃」のなかにはいっている一連の問題は、「資本論」のなかで全面的に研究され解決された。ところがこの手稿のなかにふくまれている若干の問題は、「資本論」のなかでもとくに研究されなかった。たとえば、市場における労働者の地位を悪化させる商品としての労働力の特質<sup>⑤</sup>。流行の変化や季節のうつりかわりによってひきおこされる賃金の動揺。労働者相互の競争（移住民の競争、既婚労働者にたいする未婚労働者の有利な点、農村労働者と都市労働者との競争）。労働者階級の状態にたいする税金の影響、労働組合と労働者階級の地位<sup>⑥</sup>。

賃労働のこれらすべての現象は、剰余価値にたいしてなにか間接的なものとしてあらわれる。だからその分析は賃労働にかんする特殊理論にふくまれる。

「資本論」で考察されなかった問題で賃労働にかんする特殊理論にふくまれる諸問題を、1847年にマルクスが提起したということは、偶然ではない。マルクスは「資本論」にかんする準備作業の過程で資本主義経済の全多様性を研究したし、したがってまた、剰余価値にたいして直接かかわりのない賃労働の諸現象をも研究したのである。マルクスはその主著のなかで、手もとにあった賃労働についての材料のうち資本の核心的構造の分析と直接関係する部分、すなわち剰余価値の理論のしあげと直接関係する部分だけを一般化したのである。

周知のように、労働者階級は工場労働者、鉱山労働者、農業労働者、商業・簿記プロレタリアートのような一定の構成をもっている。労働者階級のこれらの隊列のおおのこの独自の特徴、また各隊列のあいだの矛盾した相互連関——これは、剰余価値にたいして直接かかわりのない賃労働現象である。だから労働者階級の構造の分析は、賃労働にかんする特殊理論にぞくする<sup>⑦</sup>。

こんにち、労働者階級の構造のなかに大変動が進行していることと関連して、この問題はとくに学問的・政治的現実性をおびてきた。この問題は、1960～1961年の「平和と社会主義」誌上での特別討論のテーマとなった。賃労働にかんする特殊理論の枠内でこの問題

を研究することは、労働運動の緊急問題の解決をたすけるだろう。

現代帝国主義経済は、賃労働にかんする特殊理論のしあげのために豊富な材料をあたえている。このことは、帝国主義のもとでは、剰余価値にたいして直接関係をもたない賃労働現象をふくむ一般資本主義的傾向がもっとも発展した形態に到達する、ということとむすびついている。現代帝国主義経済の材料によって賃労働にかんする特殊理論をしあげることは、この材料を2つの視角から分析することを前提する。第1の視角；剰余価値とは関係のない賃労働のいろいろな現代的現象——たとえば高度に発達した資本主義諸国の労働者の実質賃金のいちじるしい上昇（1950～1965）——のなかで一般資本主義的傾向を解明すること。第2の視角；あきらかにされたこの一般資本主義的傾向が独占や金融資本などによってどのように変形されているかを分析すること。かくして、賃労働にかんする特殊理論のしあげは、現代帝国主義の研究と有機的にむすびついているのである。

賃労働にかんする特殊理論の多くの問題は、マルクス主義文献のなかで十分ふかく研究されてはいるが、しかし、この理論の独自の論理は研究されていない。そしてこのことが、個々の問題の分析も、賃労働問題全体の分析をも、まずしいものにしてしている。

賃労働にかんする先人たちの全研究に立脚して賃労働にかんする特殊理論の独自の論理をしあげる必要がある、またこれにもとずいてこの経済的カテゴリーにかんするわれわれの知識を体系化する必要がある。すなわち、K.マルクスが剰余価値についてなしとげたことを、賃労働についてやりとげることが必要である。プロレタリアートの階級斗争にとってこの仕事もっている意義は、どれほど評価してもしすぎることはない。

- ① Marx-Engels, Werke, Bd.23, s.542 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 673ページ]。
- ② Ibid. s.544 [邦訳, 同, 676ページ]。
- ③ Ibid. s.546 [邦訳, 同, 678ページ]。
- ④ 労働生産性が2倍になるときは、生活手段1単位の価値は、当初のばあいとちがって3ペンスではなく1.5ペンスである。したがって、生活手段14単位の価値は、2.1シリングである。
- ⑤ Marx-Engels, Werke, Bd.23, s.675 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 840ページ]。
- ⑥ マルクスはこの問題をつぎのように定式化している。「この市場価格の法則は、他の商品よりも労働という商品のうえにいつそう重くのしかかる。なぜなら、労働者は自分の商品を倉庫のなかにしまつておくことができず、その生命活動を売るか、もしくは生活資料を失って死ぬか、するほかないからである。

労働という販売しうる商品は、とくにその一時的な性質の点で、蓄積が不可能だという点で、また他の生産物のばあいのように、そうたやすく供給を増減できない点で、他の商品から区別される。」(Marx-Engels, Werke, Bd. 6, s. 537 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第6巻, 522ページ])。

⑦ Marx-Engels, Werke, Bd. 6, s. 538, 542, 544~545, 554~555 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第6巻, 522ページ, 526~527ページ, 528~529ページ, 538~539ページ]。

⑧ K.マルクスは剰余価値の理論においては、プロレタリアートのさまざまの隊列を単一の階級に転化せしめる共通物にとくべつの注意をはらったが、労働者階級内部で〔これらの隊列を〕孤立化させる要因についてはついでに言及しただけである。

## (第2論文)

### 「資本論」における生産的労働と不生産的労働の区分の問題

非物質的生産の急速な発展は、現代資本主義経済のもっとも重要な発展傾向のひとつである。それは、社会主義のもとでも急速なテンポで前進している。非物質的生産における経済的諸関係をマルクス主義的に分析することが最重要課題のひとつとなっているのは、そのためである。この分析の科学的基礎は、K.マルクスが「資本論」のなかでしあげた生産的労働と不生産的労働の理論のなかですえられている。しかしこんにちまで、生産的労働と不生産的労働の区分の標識にかんする問題をめぐって統一した意見はつくりだされていない。

あるひとびとは、K.マルクスの命題を引用しつつ、物質的生産に直接参加している労働だけが生産的労働たりうるとかんがえている。かれらの意見によると、非物質的生産において投下された労働は生産的労働たりえないのである。他のひとびとは、おなじようにK.マルクスの命題を引用しながら、労働の社会的、経済的形態こそ区分の標識なのだから、その労働が物質的生産で投下されたか非物質的生産で投下されたかは生産的労働と不生産的労働との区分には直接かかわりがない、とかんがえている。生産的労働と不生産的労働との区分の標識にかんする問題を研究することは、非物質的生産の経済的分析にとってはなほだ重要である。

この論文においてわれわれは、「資本論」における生産的労働と不生産的労働との区分の問題を分析するさいにわが国の文献中に発生したある種の矛盾を解決しうる可能な方途について若干の仮説的意見をのべるつもりである。区分の標識をもろもろの特殊的労働種

目に適用する問題は、この論文ではとくに考慮しない。われわれはただ、区分の標識を特徴づける諸結論を例解するために必要なかぎりでのみ、この問題にふれるだろう。材料の規模が大きいのに論文の大きさががぎられているので、われわれは論争にたちいることはせず、ただ積極的論述だけに限定せざるをえない。

いくつかの予備的注意からはじめよう。

物質的生産と非物質的生産 ——これは、社会的分業の2つの大きな方向であり、そのおのおのはもろもろの部門の総体としてあらわれる。物質的生産は、工業、農業、運輸業をふくんでいる。運輸業をのぞく物質的生産の全部門にとって特徴的なことは、労働が物のうちに体化すること、すなわち労働が物化することである。

物質的生産の一定段階で、人間の精神的欲求と健康を保障する非物質的生産が発生し発展してくる。K.マルクスは、非物質的生産には2種類の生産物が存在することを指摘した。すなわち、第1には、「……生産者および消費者とはことなる自立的姿態をとる」生産物がそうであり、「……たとえば書籍や絵画のばあい、要するに、舞台芸術家の芸術提供とはことなるあらゆる芸術生産物のばあいには、そうである」<sup>①</sup>。第2は、「……たとえば、すべての舞台芸術家、演説家、俳優、教師、医師など」<sup>②</sup>のように生産するという行為から不可分な生産物である。物質化しはするが物化することのない第2種の生産物は、非物質的生産の特質を明瞭に表現している<sup>③</sup>。

K.マルクスは「資本論」のなかで、物質的生産にもとずいて資本主義の経済的諸関係を研究したが、非物質的生産における資本主義的諸関係の諸現象がもつ特質を捨象している（かれはただ例外としてのみこの特質にふれている）<sup>④</sup>。K.マルクスのこのような方法態度は、「資本論」が当面していた課題によって制約されたものである。

① Marx-Engels, Werke Bd.26, s.373 [邦訳, 「剰余価値学説史」, 青木書店, 600ページ]。

② Ibid. s. 374 [邦訳, 同, 601ページ]。

③ 非物質的生産の定義にかんする問題、とりわけその区分にかんする問題は、わが国の文献においてなお十分に研究されていない。この問題の専門的研究はこの論文の枠をこえている。

④ マルクスが主として「剰余価値学説史」のなかで、ブルジョア経済学者たちへの批判との関連で、非物質的生産にふれたということは、示唆的である。しかも、「非物質的生産部面での資本主義の諸現象」という小さくはあるが特徴的な節は、「剰余価値学説史」の付録にふくまれているのである。

× × ×

「資本論」のなかで K. マルクスは、「生産的労働」というカテゴリーの分析を第1巻第5章の第1節からはじめている。「労働過程全体をその結果である生産物の立場からみれば、労働手段と労働対象の2つは生産手段として、労働そのものは生産的労働としてあらわれる」<sup>①</sup>。よく知られているように、生産物をつくりだす労働、つまり一定の使用価値をつくりだす労働は、具体的労働としてあらわれる。だから、うゑに引用した K. マルクスの命題は具体的労働が生産的労働としてあらわれるということをかたっている<sup>②</sup>。うゑに引用した K. マルクスの命題には、つぎの注がつけられている。「このような生産的労働の規定は、単純な労働過程の立場からでてくるものであって、資本主義的生産過程にとってはけっして十分なものではない」<sup>③</sup>。

K. マルクスは、資本主義的生産過程の立場からする生産的労働の特徴づけを「資本論」第1巻第14章のなかであたえている。資本主義的生産のもとでは、労働は、協業的性格をおび、このことが「必然的に、生産的労働の概念も、この労働の担い手である生産的労働者の概念も拡張する。生産的に労働するためには、もはやみずから手をくさすことは必要ではない。全体労働者の器官であることだけで、その部分機能のどれかひとつをはたすことだけで、十分である」<sup>④</sup>。他面、K. マルクスが強調しているように、資本主義的生産諸関係は生産的労働の概念を縮小する。資本主義のもとでは、剰余価値を生産する労働だけが生産的労働であり、したがってまた剰余価値を生産する労働者だけが生産的労働者である<sup>⑤</sup>。

第14章ではまた、経済的諸関係の体系とはかかわりのない生産的労働の特徴づけもあたえられており、しかもそれは第5章であたえられたものといくらがちがっている。K. マルクスは上記の第5章の命題の引用によって第18章を書きはじめてはいるが、かれはさらに、「……生産的労働の概念は、……活動と効果との関係、労働者と労働生産物との関係を包括している……<sup>⑥</sup>」とのべている。たがこのような規定は、物質的生産にあてはまるだけでなく、非物質的生産にもあてはまるのである。この点で示唆的なのは、K. マルクスが資本主義的な意味で生産的な労働を例示するために、非物質的生産からの例（資本家＝学校所有者を富ませる学校教師）をあげていることである。このことは、K. マルクスが第14章にいたって非物質的生産の特質を捨象することをやめたことを意味しない。K. マルクスは、このような例をあげることによって、読者の注意をこの抽象にひきつけ、

「資本論」の若干の命題を絶対化しないよう警告しようとのぞんだものとおもわれる。

したがって、資本主義のもとでの生産的労働の概念は、具体的形態における労働過程そのもの（具体的労働）を表現し、また剰余価値生産の経済的諸関係をも表現するのである。

これらの現象は生産的労働というカテゴリーの枠内でどのような相互作用をするのか、それらの弁証法的相互連関はどの点に存するのか、という問題が生ずる。これは具体的な方法論上の問題であり、生産的労働と不生産的労働とを区分する問題全体の解決はこの問題にかかっている。

この問題を解決するにあいには、K.マルクスが「剰余価値学説史」のなかでたてた一連の命題を指針とする必要がある。そのひとつはつぎの命題である。生産的労働とは、労働能力が資本主義的生産過程において登場する全関係および仕方様式をあらゆる簡略な表現にすぎない。……だから生産的労働とは、——資本主義的生産の体制においては、——その充用者のために剰余価値を生産する労働……である」<sup>⑧</sup>。さらに、「生産的労働者の労働が体化されている商品の使用価値は、きわめてつまらぬ種類のものであるかもしれない。こうした質料的規定は、労働のこうした属性〔生産的労働であること〕——これはむしろ、一定の社会的生産関係をあらゆるにすぎない——とはぜんぜんかわりがない。それ〔生産的労働であるということ〕は、労働の内容または労働の成果からではなく、労働の一定の社会的形態から生ずる、労働のひとつの規定であ」<sup>⑨</sup>。

マルクスは、生産的労働の特質の分析を総括して、つぎのように書いている。「以上でのべたところからわかるように、生産的労働だということは、さしあたり労働の一定の内容・労働の特殊の有用性・または労働の対象化たる独自の使用価値・とは絶対にかかわりのない、労働のひとつの規定である。おなじ種類の労働が、生産的でもありうるし、不生産的でもありうる」<sup>⑩</sup>。さらにマルクスは、「直接に資本と交換される」労働としての生産的労働についてのべたさい、つぎのように書いている。「かようにして、なにが不生産的労働であるかも絶対的に確定される。それは資本とでなく直接に収入と……交換される労働である」<sup>⑪</sup>。

マルクスはこれらの理論的命題を例解する数多くの例を、資本主義における物質的生産部面からも非物質的生産部面からもひきだしてきている（物質的生産部面；レストランのコックは生産的労働者であり、家事女中としての料理人は不生産的労働者である。非物質的生産部面；天才ミルトンは不生産的労働者であり、出版人のために本を書く平凡な文筆

プロレタリアは生産的労働者である)⑩。

このように、資本主義のもとでは、剰余価値の創造こそが、生産的労働というカテゴリーの基本的特徴であり、生産的労働と不生産的労働とを区別する決定的標識である。だが、つくりだされる使用価値の特殊的有用性や特質という点からみた個々の労働種目のあいだの相違、および全体としての物質的生产と非物質的生产との相違は、生産的労働と不生産的労働との区分の標識とは直接関係がない。

剰余価値を生産するためには、労働は、厳密に規定された社会にとって必要な生産物をつくりださなければならない⑪。したがって、具体的労働は、それが剰余価値生産の経済的諸関係の物質的担い手としてあらわれるかぎりでのみ生産的労働というカテゴリーにふくまれるのである、すなわち具体的労働は生産的労働というカテゴリーの従属的要素としてあらわれるのである⑫。

うえにのべたことと関連して、つぎの問題が生ずる。いったい剰余価値は物質的生产においてだけ創出されるのだろうか、それとも非物質的生产においても剰余価値は創出されるのだろうか？ もし剰余価値が物質的生产においてのみ創出されるのなら、非物質的生产における資本家たちの利潤は剰余価値再分配の結果であり、非物質的生产における労働者の労働は不生産的労働である。だがもし非物質的生产においても剰余価値が創出されるならば、この部門における労働者たちの労働も生産的労働である。

提起された問題にただしく解答するためには、K.マルクスのつぎの諸命題を考慮にいれて、問題を具体化する必要がある。①「……価値を追加する労働はすべて剰余価値をも追加しうる。そして、資本主義的基礎のうえではつねに剰余価値を追加するであろう。なぜならば、労働が形成する価値は、労働そのものの大きさによってきまり、労働の形成する剰余価値は、資本家が労働に支払う程度によってきまるからである」⑬。② 価値——これは商品のひきはなすことのできない要因である。

かくして、提起された問題はつぎのような問題に帰着する。商品は物質的生产においてだけ生産されるのか、それとも商品は非物質的生产においても生産されるのか？ 物質的生产における具体的労働だけが価値生産の諸関係の直接的担い手たりうるのか、それとも非物質的生产における具体的労働もそうでありうるのか？ 物質的生产においてのみ価値が創出されるのか、それとも非物質的生产においても価値が創出されるのか？

ここに提起された問題に解答するのに必要なかぎりでは非物質的生产を考察しようとするばあい、われわれは当然、この部面にとって特徴的な数多くの事態を複雑化する影響や事

情を捨象する。

資本主義のもとでの価値が表現しているのは、生産者たちを孤立させる分業や私的所有が存在する社会では相互的活動交換が等価交換原則にたつ生産物交換をつうじて実現されるという客観的事実である。ひとびとは、労働生産物を交換するばあいに、それとは意識せずにさまざまな労働種目をたがいに等置するのであるが、この過程でかれらの労働は抽象的労働としてあらわれ、労働生産物はこの抽象的労働の対象化として、担い手として、すなわち価値としてあらわれる。いいかえれば、私的労働——それは同時に社会的労働でもある——がその社会的性格を労働生産物の等価交換をつうじて発現させるとき、労働そのものはたんに具体的労働としてあらわれるだけではなく、抽象的労働——価値の創造者——としてあらわれ、労働生産物は商品としてあらわれるのである。

非物質的生産——それは自己に特徴的なもろもろの労働部門と労働種目をふくんでいる——は、社会的分業体系にくみこまれており、この体系のなかできわめて重要な地位をしめている。たとえば、保健や教育のごとき非物質的生産の諸部門は、社会の主要な生産力である労働力を再生産し、それゆえに社会的分業体系のなかでは物質的生産の若干の部門(奢侈品、催眠剤、武器の生産)よりも大きな役割をはたしている。非物質的生産の労働者たちは、私的所有によってたがいに孤立化させられているし、また物質的生産の労働者からも孤立させられている。その結果、非物質的生産の労働者たちは、自分たちの労働生産物を交換することによって、相互的活動交換に参加するのである<sup>③</sup>。この生産物交換のなかで、非物質的生産におけるさまざまな労働種目と他のすべての労働種目との等置がおこなわれる。その結果、非物質的生産の生産物——労働過程からきりはなすことのできない生産物をふくむ——は、購買者にとって有用物となる。すなわち社会的使用価値としてあらわれる。かくして、交換を目的とする非物質的生産の生産物は、使用価値と価値との弁証法的統一であり、つまり商品である。

周知のように、生産物が商品としてあらわれるためには、それがつぎのような基本的要求をみたしていなければならない。すなわち、(1) 他人のための使用価値でなければならない、(2) 労働によって媒介された使用価値でなければならない、(3) 交換をつうじて消費者の手にひきわたされなければならない。非物質的生産の生産も商品のこれらの特徴をすべてもっており、ただこれらの特徴がはなはだ独特な形で発現するにすぎない。K.マルクスは、この独自性に注目したが<sup>④</sup>、「資本論」のなかでこの独自性をとくに研究することはしなかった。

非物質的生産における価値諸関係が作用する可能性いかんという問題を考察するさいに想起しなければならないのは、K.マルクスが「資本論」第1巻第1章の第1節冒頭で書いたつぎのことである。「商品は、まず第1に、外的対象であり、その諸属性によってなにかある種類の間欲望をみたす物である」<sup>⑩</sup>。ここから、若干の経済学者たちのように、物なしには商品もないと結論することは、まちがっているようにおもわれる（この結論からは、非物質的生産においては価値も剰余価値も創造されない、ということになってしまう）。

K.マルクスが注意しているように、物〔Ding〕とは、「生産過程から分泌された存在をもち、生産要素の使用形態とはちがった使用形態をもつ対象<sup>⑪</sup>」である。物質的生産においては物の生産が支配してはいるが、同時にそこにはなんらの物もつくりださない、すなわち非物質的生産におけるごとく、生産物が生産＝労働過程からひきはなされない運輸のような大きな部門が存在している。「……運輸業が売るのは、場所をかえること自体である。うみだされる有用効果は運輸過程すなわち運輸業の生産過程と不可分に結合されている。人や商品は運輸手段といっしょに旅をする。そして、運輸手段の旅、その場所的運動こそは、運輸手段によってひきおこされる生産過程なのである。その有用的効果は、生産過程でしか消費されえない。それは、この過程とは別な使用物として存在するのではない。しかし、この有用効果の交換価値は、他のどの商品の交換価値ともおなじように、その有用効果のために消費された生産要素（労働力と生産手段）の価値に、運輸業ではたらく労働者の剰余労働がつくりだした剰余価値をくわえたものによって、規定されている<sup>⑫</sup>」。

このようにK.マルクスは、労働を物のなかに対象化することは価値諸関係の不可欠の属性ではないということをはっきりと指摘しているのである。

これに関連して想起されるものは、K.マルクスとB.H.レーニンが、価値を物の外皮にかくされた人間の関係として規定したということである。だから、物は価値の本質ではなく、たんに外皮なのである。K.マルクスは、「……価値……には1分子も自然素材ははいっていない<sup>⑬</sup>」と強調している。だが物のなかには自然素材がかならずはいりこむのである。

K.マルクスは、労働の物質化された表現としての商品と物としての商品とを区別している。「とはいえ、——とかれは書いている——労働の物質化・等々を、A.スミスがとらえているようにスコットランド人的にとるべきではない。われわれが労働の物質化としての商品を——その交換価値の意味で——云々するばあいには、この物質化そのものは、

商品の想像的な、すなわち単に社会的な、実存様式にはかからないのであって、これは、商品の物的現実性とはなんの関係もないものである。この商品は、一定量の社会的労働または貨幣として表象される。具体的労働の成果が商品なのだが、その具体的労働が商品になんらの痕跡ものこさないということがありうる<sup>20)</sup>。社会的労働は主として物をつくりだすがゆえに、労働が物のなかに対象化されることは商品における労働の物質化のもっともありふれた形態であるが、しかし唯一の形態ではない。労働が場所的移転のなかに対象化されることも、労働が一定の経済的諸条件のもとでたとえば罰金のなかに対象化されることも、商品における労働の物質化である。「もしかの女（女声歌手——A. コーガン）が自分の歌を貨幣とひきかえに販売するならば、かの女はそのかぎりでは賃労働者であり、あるいは商品販売者である<sup>21)</sup>」、とマルクスは書いている。またマルクスが「非物質的生産の領域での資本主義の諸現象」という節をつぎのように書きはじめたことも、示唆的である。「非物質的生産については、それが純粹に交換のためにいとなまれるばあい、つまり商品を生産するばあいでさえも、つぎの2つのばあいが可能である<sup>22)</sup>」。K.マルクスはこの2つのうちの第2のばあいの特徴づけて、つぎのように書いている。「生産されるものが、生産するという行為から不可分である……」<sup>23)</sup>。K.マルクスは、A.スミスが商品における労働の物質化を労働の物化として素朴に理解したことにたいして批判をくわえているのである。

それでは、K.マルクスが商品分析をはじめるとあって「商品は、まず第1に、外的対象であり、……物である」と指示したことを、どう説明したらよいのか？ K.マルクスは商品分析をはじめると同時に外観から本質へすすみ、商品の諸側面のうちまず第1にすぐさま眼につく側面を〔研究対象として〕固定したのである（商品は、なにかある種類の人間欲望をみたし、一定の比率で他物と交換される物である）。そしてかれはすぐさま物から商品の使用価値と価値に移行している。このような接近方法をとるばあい、商品の使用価値と価値とが物の属性として、すなわちせまい意味において考察されたのは当然である。こうした接近方法は、「資本論」全体にとっても特徴的である（K.マルクスは「資本論」のなかで、運輸業における商品的諸関係の特質を、いわんや非物質的生産におけるその特質を、ついでに論じたにすぎない<sup>24)</sup>）。商品の定義をするばあい、K.マルクスが第1節のなかでやったように（運輸業をのぞく）物質的生産の存在から理論的に出発するだけでなく、もし運輸業や非物質的生産の存在をも考慮にいれるならば、使用価値は物としての有用性も労働生産物一般としての有用性も表現することになり、価値はたんに物の

なかに対象化された社会的労働だけでなく社会的労働一般をも表現することになっただろう。

この見地から、価値諸関係の外皮にかんする問題に接近すべきである。

K. マルクスが指摘したように、価値は、ある商品の他の商品にたいする社会的関係のなかでのみ現象することができる。物質的生産が支配的であり、したがって商品の大部分が物であるという理由によって、価値諸関係は物の交換の形で発現するのである。この交換のなかである物の使用価値は他物の価値を表現する。

しかし価値は、ただ物と物との交換のなかでのみ現象するわけではない。ある種の条件のもとで生じうる事例をあげてみよう。医師は患者に手術をほどこし、これにたいして10kgのパンをうけとる<sup>⑤</sup>。この社会的関係は、「ひとつの手術=10kgのパン」という定式で表現することができる。このばあいには、労働（手術）過程からきりはなせない生産物が物（パン）と交換されるのである。この社会的関係のなかには、物と物との関係のばあいとおなじように、一方の極（手術）は相対的価値形態にあり、他の極（パン）は等価形態にある。この関係のなかでパンは、価値の対象化としてあらわれ、そのようなものとして手術の価値を表現する。手術の価値は具体的労働によってではなく抽象的労働によって創出されるという事実は、パンはそれが手術と等価であるかぎり、したがって価値であるかぎり、手術とおなじ労働からなるということのなかに表現されている。いいかえれば、2つの商品（物）——リンネルと上衣——の簡単な価値形態にかんしてマルクスがのべたことは、手術とパンという2商品の簡単な価値形態にもあてはまる、ということである。それとともに、商品自体が物でないときにも物の形態で表現されるということ、あるいはおなじことだが、商品が物という性質をもつことは価値表現が物の形態をとるための必要条件ではないということである。

さらに注意すべきは、手術とパンとの交換においては、手術が等価形態として、パンは相対的価値形態としてあらわれることができる。ということである。このような関係においては、手術は、それがどんなに複雑なものだとしても、たんにひとつの属性として、すなわち抽象的労働の対象化として、価値としてあらわれ、それによってパンの価値を表現するのである。このように、簡単な価値形態にあてはめたばあい、価値諸関係の物的外皮——これがもっともありふれた外皮である——が同時にまた価値諸関係の唯一の外皮ではないし、価値は労働過程からわかつことのできない生産物においても表現されることがある。このことを強調することが重要である理由はつぎの点に、すなわち、価値の本質がそ

の外皮にたいしてもっている自立性は簡単な価値形態においてこそ最高度にあらわれるという点にある。

K. マルクスは、商品交換の拡張とともにすすむ簡単な価値形態の矛盾の発展が1個の商品(金)を全商品世界から区別するところまでゆき、あらゆる商品がこの商品と交換され、したがってこの商品がすべての商品の価値を表現するようになると指摘した。金は物であるがゆえに、あらゆる商品の価値——物質的生産において創出された商品の価値も非物質的生産において創出された商品の価値も(労働過程からきりはなすことのできない商品をもふくむ)——が物的外皮をまとうことになる。だがこの事実から、価値はただ物のなかにふくまれているだけで、労働過程からきりはなしえない生産物は価値をもたない、という反対の結論をひきだすことはまちがっているだろう。

それとともに強調しなければならないのは、非物質的生産の商品は商品総量のなかであきらかに少数だということである(このことは、「資本論」が執筆された19世紀中葉にはとりわけ特徴的であった)。物をつくりだす物質的生産が優勢だということから、価値諸関係として存在する大部分の商品の属性とが癒着し、現象の外観では価値関係が物の関係としてあらわれる、ということになってしまう。そしてこのことが逆に、交換を目的とする生産物が物として存在するときにはじめて商品となり価値をもつ、という幻想的表象の発生をうながすのである。

非物質的生産における価値諸関係の問題は、発生的側面をもっている。周知のように価値諸関係は物質的生産において誕生し形成されてきた。物質的生産の価値諸関係がたかい成熟度に達したとき、社会的労働の特殊なしだいに大きくなる部門としての非物質的生産がうまれ発展しはじめた。その結果、物質的生産の価値諸関係は、質的にも量的にも、非物質的生産における価値諸関係にたいして規定的影響をおよぼすことになった。だがそれとともに、非物質的生産における価値諸関係は、この生産の特質によって制約されて自立的な発展をもするのである。かくして、非物質的生産における価値諸関係は、物質的生産における価値関係の転化形態であり、変形された形態なのである。

非物質的生産における価値諸関係の若干の特殊性にかんたんにふれよう。

非物質的生産においては、使用価値のこの特殊形態のなかにはいりこむ個々の使用価値の特質が、物質的生産におけるよりもいちじるしい。したがって、非物質的生産においては、独占価格の諸関係が物質的生産におけるよりもはるかにひろくゆきわたっている。いかえれば、価値の大きさが生産物価格を規制する度合は、非物質的生産のほうが物質的

生産におけるよりも小さい。これによって、非物質的生産における価値諸関係の作用の「変装」がつよめられる。

非物質的生産の商品の価値の大部分がこれに対応する物質的生産の商品から移転された価値であるというばあいがある。たとえば、書籍の価値の大部分は物質的生産のなかで、——紙や印刷機械の生産のなかで、印刷工程のなかで、等々——つくりだされる。書籍は協業労働の結果であり、そこでは文筆家の労働が補助的ではあるがもっとも重要な機能をはたすが（用紙、製本、活字などが最良だとしても、無能文筆家によって書かれた書籍の確実な販売は保障されない）、しかし書籍の総価値のなかで文筆家の労働がつくりだした価値のしめる比重は、とりわけもしその書籍が大部数で出版されたならば、はなはだ小さなものである。非物質的生産の商品がもっているこのような特殊性は、また、非物質的生産においてはなんらの価値も創出されないかのような幻想をたやすくつくりだしてしまうのである。

（運輸業をのぞく）物質的生産においては、労働過程が終了したのちにも物としての商品は存在しつづける。だから、商品の価値も、それをつくりだした労働からきりはなされて存在する。ところが多くの非物質的生産形態の特質は、商品の生産と消費の過程が時間的にも空間的にも一致するという点にある（歌手のコンサート、外科手術など）。このような商品は、生産されたとたんにたちまち流通から脱落して、商品ではなくなる。だから、これらの商品の価値もそれをつくりだした労働ときりはなされては存在せず、労働過程の停止と同時に消滅する。この特殊性は、あたかも非物質的生産において販売されるのは商品ではなく労働そのものだという幻想の発生をたすける。非物質的生産における商品物神の特質のあらわれのひとつであるこの種の幻想は、この部門における価値諸関係の暴露を困難ならしめるのである。

われわれは、うえにのべたことが、物質的生産においてのみ価値を創出することができるという観点は現象のみせかけの外観を反映しているということをしめしている、とかんがえる。そしてもしこの観点を論理上の結末までつきつめるならば、それは価値の実体規定と矛盾におちいることになる。価値の実体は抽象的労働である、すなわちそれは特殊的諸労働のあいだに存在するいっさいの差異をなくした労働一般であり、この差異のなかには物質的生産と非物質的生産との差異もふくまれているのである。物質的生産における労働は（非物質的生産における労働とまったくおなじように）、もろもろの具体的労働種目の総体としてあらわれ、このようなものとしては価値実体と直接関係をもたない。

K.マルクスは「資本論」において物質的生産だけに〔研究対象を〕限定したがゆえに、物質的生産における労働と非物質的生産における労働とを比較することはしなかった。したがって、物質的生産における労働を非物質的生産における労働から区別する独自の特徴が具体的労働の独特の発現として「資本論」のなかにはいることはなかった。もしこのような接近方法のもとで、物質的生産におけるさまざまな具体的労働種目によって作りだされる使用価値を捨象するならば、生産物は抽象的労働の対象化として、つまり価値としてあらわれる。ところがもし物質的生産も非物質的生産も存在するということから出発するならば、物質的生産における労働の独自の特徴は（非物質的生産におけるとおなじように）具体的労働の発現としてあらわれるだろう。このような接近方法のもとでは、価値の実体をなす労働は、物質的生産の特質からも非物質的生産の特質からも抽象された労働となる。

価値は物質的生産においてのみ創出されるという命題は、物質的生産と非物質的生産との対比にもとずいている、すなわちK.マルクスの上記の出発前提の枠をこえるものである。だから、この命題を補強しうるようなK.マルクスの個々の意見は、この命題のただしいことを証明するものではない。われわれがもしこの命題を論理上の結末までつきつめてみるならば、不可避的に、価値の実体規定を具体的労働種目の総体に依存する抽象的労働に対置することになる。このように、「反対側からの考察」によってひきだされる結論は、価値は物質的生産においてのみ創造されるのではなく、非物質的生産においても作りだされる、ということである。

この結論をただしいとかがえるならば、われわれは論理的につぎの結論に到達するはずである。すなわち、資本主義的生産諸関係に包摂された非物質的生産における労働が剰余価値をつくりだすことはさけられず、したがって生産的労働としてあらわれることはさけられない<sup>②</sup>。このような労働によって生産される商品は、資本の生産物であり、剰余価値の垣い手である<sup>③</sup>。それとともにここから結論されるのは、資本主義的に組織された非物質的生産における労働者たちの支払は、物質的生産において創出された価値の再分配によって実現されるのではなく、かれら自身がつくりだす価値によって実現されるということである。

もちろん、非生産部面の労働者は、賃金の形でうけとる価値の大部分を物質的生産で作りだされた商品を手にいれるために支払う。これらの商品の量が変化すれば、それに応じて、非物質的生産の労働者を維持する物質的手段のファンドもまた変化する。しかしこ

の相互関連は、非物質的生産において価値や剰余価値が創出されるのかどうかという問題と直接かかわりがない。逆に、物質的生産の労働者はその賃金の一部を非物質的生産において実現するのであって、それゆえに物質的生産の労働者の労働力を再生産する可能性はなんらかの程度において非物質的生産の発展に依存しているのである。

「生産的労働」というカテゴリーは、社会的なものと物質的なものとの統一である。社会的なものは剰余価値の生産のなかに表現されるが、物質的なものは労働過程そのものにおいて——その労働が物質的生産で投下されるか、非物質的生産で投下されるかにはかかわりなく——表現される。

K.マルクスが指摘しているように、資本主義的生産諸関係は非物質的生産よりもはるかに大きな程度で物質的生産を包摂している。このことが逆に、剰余価値は物と癒着しているとか、生産的労働は物質的生産における労働と同一物であるとか、という結論にみちびくのである。「かようにして生産的労働は、その決定的な特徴——これは、労働の内容とはぜんぜん無関係であり、かかわりのないものである——とはことなる第2の副規定をうけとることになる」<sup>②</sup>。

われわれの注意をひくのは、「生産的労働は物質的富に表現される労働だという補足的な副規定」という節——この節はうえに引用したK.マルクスの命題によってむすばれている——のあとに「非物質的生産の領域での資本主義の諸現象」という節がつづいており、そこでK.マルクスは非物質的生産においても生産的労働が機能していることを指摘しているということである。「剰余価値学説史」への付録のなかでの分節のこうした序列によっていっそうよく理解できるのは、物質的生産における労働としての生産的労働の追加的特徴づけが非物質的生産においても生産的労働が機能する可能性を排除しないだけでなくむしろそれを前提しているということである。これに関連して注意すべきは、物質的生産においてのみ生産的労働が機能できるという観点の発生的根源のひとつが、生産的労働の基本的特徴づけと補足的特徴づけとを同列にみる点にひそんでいる、ということである。

生産的労働の補足的特徴づけを前面におしだすことは、理論的には現象の表面を反映することになる。物と一致する価値・剰余価値・生産的労働の諸関係は、物と物との関係として現象の表面にあらわれてくる。だからまた、物をはなれては価値や剰余価値や生産的労働も存在しないという表象が発生する。A.スミスを批判したさい、K.マルクスはこれに関連してつぎのように書いた。すなわち、生産的労働と不生産的労働をその素材的内容

によって規定しようとする努力のひとつの源泉は、「資本主義的生産様式に固有の、そしてこの生産様式の本質から生ずる物神的見解」であり、「この見解は、経済的形態規定性——どういうわけで商品であり、またどういうわけで生産的労働であるのか、等々——をこれらの形態規定またはカテゴリー自体の物的担い手にそなわる属性として考察するのである」<sup>⑧</sup>。

このようにK.マルクスは、商品物神が生産的労働の必要条件としての物化というまちがった表象をうみだす源泉のひとつだということを指摘したのである。

それとともにK.マルクスには、一見したところかれが非物質的生産における労働を生産的ではありえないとかがえていたことを証明するような見解、すなわち、すでに引用した「資本論」の諸命題と矛盾するような見解がみられるのである。この種の発言のひとつを検討してみよう。

K.マルクスはA.スミスを論じてつぎのように書いている。「だからスミスは、商品を生産するような、または、労働能力そのものを直接に生産し、形成し、発展させ維持し、再生産するような労働を、生産的労働として認識すべきである。この後者をA.スミスは、かれの生産的労働の目録から除外する。恣意的なことではあるが、もしこれをふくめれば、生産的労働にかんするあやまった主張に門戸をひらくことになるという、ある種のただしい本能をもってしたことである」<sup>⑨</sup>。K.マルクスがのべたこの意見は、ときおり、A.スミスの正しい本能がK.マルクスの観点とまったく合致したとか、K.マルクスはA.スミスとおなじように非物質的生産において生産的労働が機能する可能性を排除したとかの意味をもつものとしてあつかわれている。K.マルクスの意見をこのようにあつかうことは、ただしくないとおもわれる。

うえにあげたK.マルクスの命題は、A.スミスによってあたえられた生産的労働の第2のまちがった規定（商品を生産する労働が生産的である）の批判との関連でのべられたものである。K.マルクスは、もしA.スミスが商品を素朴に理解しなかったならば、賃金労働力をも商品としてみとめざるをえなかったであろう、と書いている。そこでA.スミスは、生産的労働のまちがった規定を論理的結末までつきつめたとき、医師や教師の労働を生産的労働であるとみとめなければならなくなったであろう。だがA.スミスはそうはしなかったのであり、そのようなことをすればかれの〔理論の〕構成全体がこわれてしまうことをかれが理解していたのは明白である。

われわれの意見では、この断片のなかでマルクスがみずから提起した課題は自分の見

解を叙述することではなくて、A.スミスのさいしょの志向からみれば労働力を再生産する労働は生産的労働とかがえなければならないのに、健全な本能がA.スミスをしてまちがった志向から「ただしい」結論をひきださせなかったということを、指摘することであった。われわれのみるところでは、A.スミスの健全な本能がK.マルクスの観点と合致するのはただ、労働力を再生産する労働が所得と交換されるばあいだけである。ところがこの労働が資本と交換されるときにはA.スミスの健全な本能もK.マルクスの観点と正反対のものとなるのである。

すでにのべたように、K.マルクスは「資本論」のなかで、非物質的生産における資本主義の諸現象を捨象した。ところでこんにち、K.マルクスをして非物質的生産をとくべつに研究させなかった諸事情は存在しなくなった。剰余価値の理論はすでにしあげられており、非物質的生産における資本主義の諸現象を分析するための科学的土台は創造された。非物質的生産における資本主義の諸関係は例外ではなくなり、この部面であまねくゆきわたった<sup>⑩</sup>。したがって、科学的方法論からみても、資本主義経済の客観的諸条件からみても、非物質的生産における資本主義的諸関係の特質を分析することは現実的となっている。そしてこのばあい、もっとも重要な問題のひとつが非物質的生産における生産的労働の特殊性の問題なのである。

- ① Marx-Engels, Werke, Bd23, s.196〔邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 大月書店, 第23巻, 238ページ〕。
- ② K.マルクスは, 「資本論」第1巻第5章の第1節のなかで, 労働過程を具体的労働の過程として研究している。
- ③ Marx-Engels, Werke, Bd.23, s.196〔邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 238ページ, 注(7)〕。
- ④ Ibid. s.531〔邦訳, 同, 660ページ〕。
- ⑤ Vgl. Ibid.〔邦訳, 同〕
- ⑥ Vgl. Ibid.〔邦訳, 同, 参照〕。
- ⑦ Ibid. Bd.26, s.359〔邦訳, 「剰余価値学説史」, 前出, 579~580ページ〕。
- ⑧ Ibid. s.121〔邦訳, 同, 217ページ〕。
- ⑨ Ibid. s.364〔邦訳, 同, 587ページ〕。
- ⑩ Ibid. s.120〔邦訳, 同, 216ページ〕。
- ⑪ Vgl. s.122, 364〔邦訳, 同, 587ページ, 参照〕。
- ⑫ K.マルクスが生産的労働の定義にとって労働過程そのものの内容はどうでもよいと見たとき, ただ「さしあたり」(Ibid. S.368〔邦訳, 同, 393ページ〕)そう

であるにすぎなかったのである、つまり、生産的労働と不生産的労働の区分の標識をあきらかにするための接近方法が問題だったのである。

- ⑪ K.マルクスは、生産的労働の特徴づけを労働過程のような要素からはじめ（「資本論」第1巻第5章）、第14章ではじめて他の要素——労働の経済的形態を指摘している。かれは、これらの要素の相互連関を「剰余価値学説史」のなかであきらかにしている。K.マルクスのこのような接近方法は、剰余価値論をしあげるさいの論理によって制約されたものである。そこでもしK.マルクスのこれらの命題およびかれが生産的労働を研究した順序を絶対化してしまうならば、このことは、生産的労働の本質は生産物をつくりだす労働過程そのものであって剰余価値生産の経済的諸関係は生産的労働の発現形態であり、このカテゴリーの従属的要素である、というまちがった結論にみちびくことになる。
- ⑫ Marx-Engels, Werke, Bd.24, s.139〔邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第24巻, 168ページ〕。
- ⑬ 非物質的生産の一連の部門では生産物がそれを生産する行為からきりはなすことができないので、労働活動そのものが交換されるのだという表象がうまれる。しかしこの表象は幻想である。人間欲望を充足するのは活動そのものではなく、労働活動の生産物だけである。だからまた市場での交換の対象たりうるのは、活動の結果であり、活動の生産物であって、活動そのものではない。つぎの事例は示唆的である。歌い手はながいあいだ自分の声を改善し、コンサートで全力をあげるかもしれないが、歌はへたくそであった。このばあい、コンサートの入場券は〔歌の〕1単位を買うのである（聴衆は、歌手の労働活動を買うのではなく、歌手の生産物を、つまりこのばあいには歌を買うのである）。
- ⑭ Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.26, s.248, 249〔邦訳, 「剰余価値学説史」, 前出, 411ページ, 参照〕。
- ⑮ Ibid. Bd.23, S.49〔邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 47ページ〕。
- ⑯ Ibid. Bd.24, s.59〔邦訳, 同, 第24巻, 68ページ〕。
- ⑰ Ibid. s.60~61〔邦訳, 同, 69ページ〕。
- ⑱ Ibid. Bd.23, s.62〔邦訳, 同, 第23巻, 64ページ〕。
- ⑲ Ibid. Bd.26, s.134〔邦訳, 「剰余価値学説史」, 前出, 237ページ〕。
- ⑳ ≪Архив Маркса и Энгельса≫, т. II (VII), стр.139〔「マルクス=エンゲルス・アルヒーフ」, 第2巻 (VII), 139ページ〕
- ㉑ Marx-Engels, Werke, Bd.26, s.373〔邦訳, 「剰余価値学説史」, 前出, 600ページ〕。
- ㉒ Ibid. s.374〔邦訳, 同, 601ページ〕。
- ㉓ ここに引用したK.マルクスの意見——ここでは、労働過程からわかつことのでき

ない非物質的生産の生産物が商品として規定されている——が「資本論」にとって例外であることは、この理由によってあきらかである。

- ②⑥ このような関係が典型的でないのはもちろんであるが、しかし貨幣制度が国内ではほとんど完全に混乱したときには、このような関係はつねに発生する。
- ②⑦ Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.26, s.364, 121 [邦訳, 「剰余価値学説史」前出, 217, 587ページ, 参照]。
- ②⑧ 当然のことながら、生産的労働者は社会にとって必要であるはずである。しかし、労働の生産的性格を規定する決定的条件は労働の特殊的有用性ではない。ここで主要なことは、経済的形態——この形態のもとで労働過程がおこなわれる——である。もしこの命題を論理的帰結までつきつめてみるならば、つぎのようなことになる。金利生活者が高い支払いで治療をうける資本主義的病院で賃労働をしている医者たちは、剰余価値をつくりだし、生産的労働者である。ところが、労働者用の無料慈善病院——ここでは労働力が再生産されており、したがって医師の労働はまえのばあいよりも社会にとってはおるかに有益である——で賃労働をしている医者たちは、剰余価値をつくりださず、生産的労働者ではない。この逆説は労働と労働の資本主義的形態とのあいだの敵対的矛盾のひとつのあらわれである。まさに労働の資本主義的形態から、寄生的消費を充足させる労働が生産的労働としてあらわれることができるのに、労働力を再生産する労働は不生産的労働としてあらわれるという結果が生ずるのである。
- ②⑨ Marx-Engels, Werke, Bd.26, s.364 [邦訳, 「剰余価値学説史」, 前出, 600ページ]
- ③⑩ «Архив Маркса и Энгельса», т. II (VII), стр.143 [「マルクス=エンゲルス・アルヒーフ」, 第2巻 (VII), 143ページ]。
- ③⑪ Marx-Engels, Werke, Bd.26, s.135 [邦訳, 「剰余価値学説史」, 前出, 238ページ]
- ③⑫ アメリカの労働問題研究協会の計算によると、アメリカ合衆国における医師の半数が「巨大な病院, 付属病院に勤務しており, 俸給いがいに他のいかなる生計源ももたない。まして看護婦その他の下級医療職員については、このことはいっそうただし」«Структура рабочего класса капиталистических стран». Прага, 1963, стр.63 [資本主義諸国の労働者階級の構造], プラハ, 1963年, 63ページ]。